

小林秀雄に関する総合的研究

山本 勇人 文学研究科 文化構想学専攻 アジア文化学専修 博士後期課程

I. 新たな時代の〈小林秀雄〉のために：研究対象と問題意識

■ 小林秀雄（1902-1983）

- 東京生れ、文藝批評家。東京帝国大学文学部仏蘭西文学科卒業。1929（昭和4）年に「様々なる意匠」が雑誌『改造』懸賞評論二席に入選し、文壇デビュー。同時代の文学思潮を批判し、「作者の宿命の主調低音」と対峙しつつ「己れの夢を懐疑的に語る」批評の自律を説いた
- 著書に『私小説論』（1935）『無常といふ事』（1946）『モオツアルト』（1947）『近代絵画』（1958）など。『本居宣長』（1977）で独自の日本精神史を構築。「近代批評の確立者」として日本文学史にその名を刻む。アルチュール・ランボーをはじめ、フランス文学の優れた翻訳者としても知られる

■ 『小林秀雄全集』（新潮社、2001-2002、全16巻）の意義と課題

- 著者没後初の個人全集（第五次全集）。普及版として『小林秀雄全作品』全32巻が続刊
- 従来の全集には未収であった作品が数多く収録され、六十余年にわたる文業の俯瞰が可能となる。新全集刊行を皮切りに、出版界に「小林秀雄ブーム」が到来し、学術的な場面においても研究方法や問題意識が多様化した（研究成果①で現状を整理）
→ ただし、神聖化とその批判という、「評価の二極化」は従来と大きく変わらず
⇒ 三つの課題……①個別の作品の異同調査・註釈作業、旧蔵書の活用による、最新『全集』の不備を補う基礎的研究 ②時として非論理的・内閉的と評される修辭的表現に対するテキスト分析 ③同時代の文学者・思想家・メディア環境との相互交渉の検討
⇒ 「批評の神様」の消費・再生産を超えて、作家の時代性と普遍性を総合的に探究する

II. 最新全集の資料的補完に向けた取り組み

■ 成城学園教育研究所「小林秀雄文庫」における資料調査

- 1990年代に遺族より寄贈された、著者晩年の蔵書1,490冊（和書・洋書）を保存・公開中（※1）
- 「本居宣長」連載期（1965-1976）に参照したと思しい近世思想文献を中心に、小林自身による線引き・書き込みの認められる資料が多数存在する
→ 高い資料的価値を持つが、ごく一部の研究（※2）を除いて注目されず、未整理
⇒ 現地調査に基づく詳細目録の作成を実行中。
⇒ 調査によって明らかになった著者の線引き・書き込みは、個別の作品分析にも活用（研究成果⑤）

■ 本文校訂に基づく作品研究

- 小林の作品（評論・翻訳）には、初出（雑誌掲載版）から単行本、全集類への収録過程で大幅な改稿が施されたものが多い。その背景には、発表当時の言論状況や、作者自身の思考の変遷が複雑に絡み合う。しかし、最新全集では各作品の校異が示されていない
⇒ 作品研究において、初出誌・単行本等複数の版を参照し、本文の異同に注目した読解を展開。テキストの動的な様態を明らかにした（研究成果②,③）

（※1）青柳恵介「教育研究所にて保管している「小林秀雄文庫」について」『成城国文学』（20）2004.3
（※2）権田和士「言葉と他者—小林秀雄試論」青簡舎、2013、第II部第二章「換骨される典拠—『本居宣長』の材源と論理」

III. 〈詩的言語〉の生成過程をたどる：方法としての表現研究

■ 小林秀雄と詩（ポエジー）

- 「小林秀雄氏は批評家というよりむしろ詩人だと僕はかねてから思っている」（中村光夫「詩人小林秀雄論」『日本読書新聞』1946.7.10）
- 「小林がボードレールやランボーから受け取った芸術否定と実行は、それ以前の日本のサンボリズムの文脈には存在しえないものであった。それは、（中略）「小説の時代」にふさわしい詩（ポエジー）の発見を促そうとするものだった」（絳秀実「詩的モダニティの系譜」『すばる』1990.7）
→ 戦後間もない時期から現在に至る評価・研究史のなかで、小林の批評はしばしば近代詩との関わりにおいて論及されてきた
→ 具体的に批評のいかなる部分に「詩」を見出せるかという点は十分議論されていない
⇒ 現代文学理論の応用によって、作者の無意識的な言語行為をも含むテキストとして批評文を分析し、語彙・修辭・構成などの諸要素から、〈詩的言語〉の生成を読み解く

■ 主題としての〈哀悼〉

- 「死者は去るのではない。還つて来ないのだ。と言ふのは、死者は、生者に烈しい悲しみを遺さなければ、この世を去る事が出来ない、といふ意味だ。それは、死といふ言葉と一緒に生れて来たと言つてもよいほど、この上なく尋常な死の意味である」（小林秀雄『本居宣長』）
→ 小林の文学活動は、青年期から晩年に至るまで、近い人物との「死別」の過程でもあった。個人史を離れてみても、戦争と革命の世紀である20世紀が、膨大な「死」を齎したことは言をまたない。この問題を〈詩的言語〉との連関の上に捉え直す
⇒ 研究成果②：日中-アジア・太平洋戦時下における小林の歴史表象を問題として、作者が従軍記者としての中国滞在中に直面した〈死者〉の表象不可能性に注目。初出・全集未収テキストの分析を通して、歴史論における〈哀悼〉のイメージ=「死んだ子供を悼む母親」の生成が明らかとなった。さらには古典文学論（「実朝」1943）において、同イメージが「歴史家」→「詩人」の書記行為へと変容することを論証した
⇒ 〈哀悼〉の主題によって、代表作への従来の評価を更新してゆく（研究成果④）

IV. 「哀悼の文藝史」を展望する：私たちが〈死者〉との関係を築くために

■ 葬送儀礼・死生学・グリーフケア……現代社会の課題と文学

- 近年、歴史学・宗教社会学・文化人類学などの諸分野において、喪失の悲しみを抱えた人間の生のあり方を記述し、その新たな可能性を模索する研究が進展している（※3）。自然災害や疫病が猛威を振るい、超高齢化社会が加速する現代社会を生きる私たちにとって、死者との関わりを考えることは共通の課題といえる
- 文学・芸術もまた、ギリシア神話の昔より、愛する者との死別の経験やその苦悩とともにあった（オルフェウス神話）。愛と死は、あらゆる表現において最大の主題である
⇒ 将来的に、日常的な言語秩序とは異なる〈詩的言語〉によって綴られる〈哀悼〉を軸として、小説・詩歌・評論といった複数のジャンルを総合する文藝史を構想したい。それは、死者とともに歩む共生社会を考えるヒントとなりうる

（※3）佐藤弘夫『死者の花嫁—葬送と追想の列島史』幻戯書房、2015／高橋原・堀江宗正『死者のカー津波被災地「霊的体験」の死生学』岩波書店、2021／坂口幸弘『増補版 悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ』昭和堂、2022／山本幸司『死者を巡る「想い」の歴史』岩波書店、2022、など

◆ **これまでの主な研究成果** ※このほか、2022年度より領域横断的な人文知の学びを目的とした「木野人文学会」を主催し、対面・オンラインでの研究会を通じて、所属や専攻の垣根を超えた学問的交流の場を構築している

①論文「小林秀雄研究の現在と未来——言説・思想・表現・戦争・哀悼」『京都精華大学紀要』第55号、2022年3月／②論文「《沈黙》する批評言語——戦時下の小林秀雄における歴史表象」『日本近代文学』第106集、2022年5月／③論文「《再生》する詩的言語——小林秀雄と中原中也における〈哀悼〉の交錯」『関西近代文学』第3号、2024年3月／④口頭発表「小林秀雄「骨董」「真贋」の位置——文学・美術批評との相関を通して」日本近代文学会 秋季大会、2023年10月（北海道大学）／⑤口頭発表「小林秀雄の思想形成における神秘主義」東アジア文化交渉学会 年次大会、2024年5月（オンライン）